

県産米、消費拡大へ



授業実施に向けて意見 を交わす青年部員たち

創生

ふくしまの農業

県産米の魅力を発信し、消費拡大を模索する中、県産米の販売業者らでつくる青年部の前に立ちはだかったの

が風評の壁だった。課題解決に向けて部員が着目したのがフェイスブックやツイッターなどSNSを多用していく若者の情報発信力だ。

青年部長の猪俣優樹さん(四二)は会津坂下町は今年二月、母校である東京農大の国際食農科学科教授の上岡美保さん(四三)に授業の実

き、情報を発信できるよう育てたい」。上岡さんは快諾した。学生の多くは卒業後に地元での就農や農業関連企業へ就職を志望している。日本全国から集まる学生が学んだ知識をそれぞれの故郷や就職先で周囲に広める

【図】の通り。授業は十二月、今年度新設された国際食農科学科の学生約百二十人を対象に東京都世田谷区の同大で実施する。猪俣さんら部員が教壇に立ち、放射性セシウム濃度を調べる全量全袋検査で、二年連続で食品安全法の基準値（一千

当たり一〇〇糲) を超える米が出ていないことや原発事故後の県内生産者による懸命な安全対策など県産米流通に携わる立場ならではの生の声を伝える。農産物検査の疑似体験も繰り広げる。

しさなど米食の魅力も紹介する。上岡さんは「日本の優れた農産物や文化を広く国内外に発信できる人材育成に向け、今回の授業は貴重な経験となるはず」と期待する。猪俣さんは「授業を成功させ、来年以降も取り組みを継続したい」と意欲を示した。

県米穀肥料 協組青年部

県米穀肥料協同組合青年部は東京農大（東京都）の学生の協力を得て東京電力福島第一原発事故に伴う県産米への風評払拭（ふっしょく）対策に乗り出す。部員が県産米を取り巻く現状

や安全性、おいしさなどを授業で講義し、学生は情報を会員制交流サイト(SNS)などで発信して理解の輪を広げる。併せて米食の魅力も伝え、消費拡大に結び付ける。

安全講義、SNS発信

県米穀肥料協同組合青年部の取り組み

